

イネミズゾウムシの効率的防除法について

川村 清隆・近藤 篤・大野 文彦・小嶋 俊彦

イネミズゾウムシの防除は、粒剤の育苗箱施用や水面施用が普及しているが、環境に配慮した効率的な防除法を検討した。

1. 方法

1) 試験場所：犬上郡多賀町敏満寺

2) 供試薬剤、散布（施用）法

(1) エトフェンブロックス粒剤全面散布 (3kg/10a)

・額縁散布・局所散布

(2) シクロプロトリン粒剤全面散布 (10袋/10a) ・

局所散布

(3) ベンフラカルブ粒剤箱施用苗の全面移植 (50g/箱) ・

額縁移植

(4) 額縁散布・額縁移植は、ほ場の周囲3m (10列) に散布または移植した。局所散布は堤防側畦畔から3mの部分に散布した (図1)。

3) 調査地点

①堤防側から1.5mの枕部 ②畦畔中央部から1.5m地点 ③ほ場の中央部で (図1)、各50株 (1994年は25株) の被害度を調査した。

2. 結果および考察

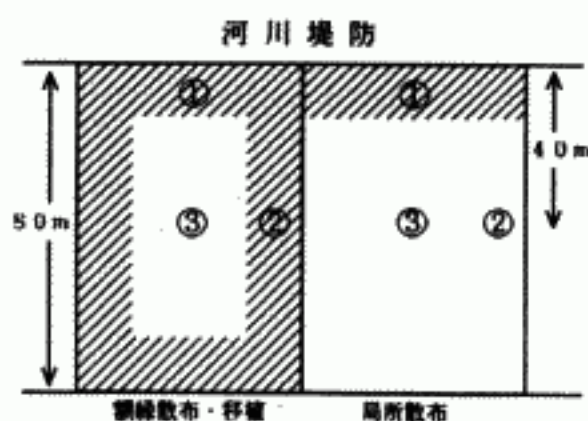


図1 薬剤散布状況。

1) 5月下旬のイネミズゾウムシの被害度は、堤防側、畦畔中央部、ほ場中央部の順に低くなっており、越冬成虫は主に堤防側から侵入したと思われる (表)。

2) エトフェンブロックス粒剤の額縁散布および堤防側3mの局所散布は、堤防側では全面散布と同等の防除効果が認められた (図2)。

3) シクロプロトリン粒剤の局所散布は、堤防側では全面散布と同等の防除効果が認められたが、畦畔中央部での効果はやや劣り、畦畔からの侵入に対する効果は不十分であった (図3)。

4) ベンフラカルブ粒剤箱施用苗の額縁移植の防除効果は高く、全面移植と大差なかった (図4)。

以上の結果から、エトフェンブロックス粒剤の額縁散布およびベンフラカルブ粒剤箱施用苗の額縁移植は効果が高く、実用性はあるものと考えられた。堤防側の局所散布は、畦畔からの侵入を防ぐことはできず、シクロプロトリン粒剤はほ場全面に拡散するため、効果の劣る場合が多いと考えられる。

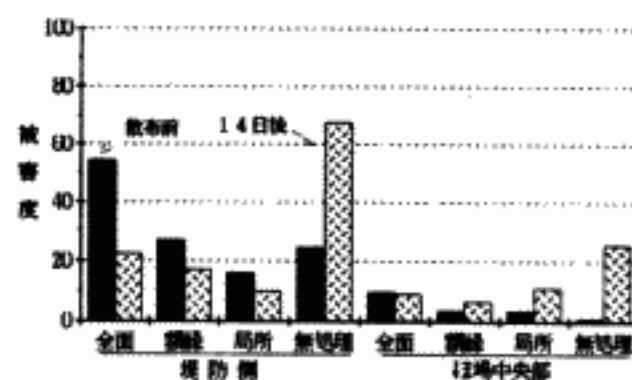


図2 エトフェンブロックス粒剤による防除 (1992)。

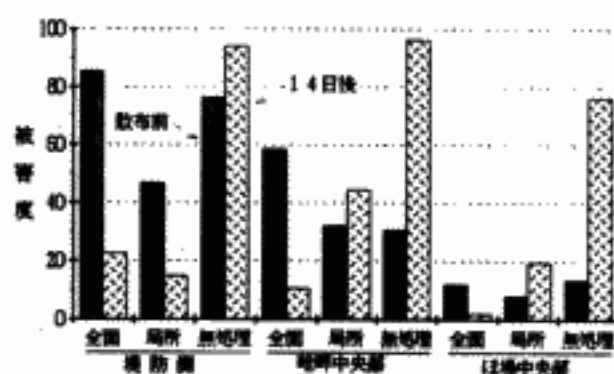


図3 シクロプロトリン粒剤による局所散布 (1993)。

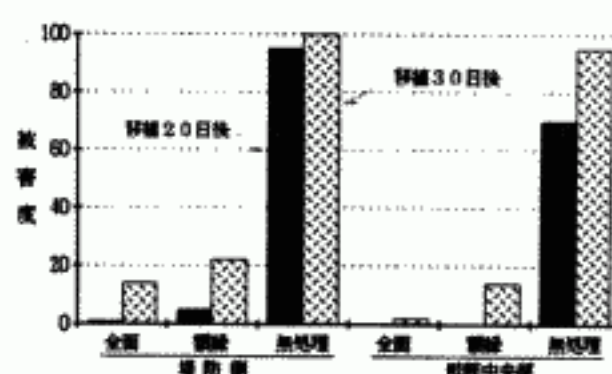


図4 ベンフラカルブ粒剤による額縁移植 (1994)。

表 薬剤散布前の被害度

調査年次	堤防側	畦畔中央部	ほ場中央部
1993	69.7	40.3	11.2
1994	97.7	74.0	-

数字は3ほ場の平均値